
恋の果実

葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋の果実

【Nコード】

N2718Z

【作者名】

葵

【あらすじ】

あることをきっかけに、人が怖くなり、信じられなくなった女の子。桃山桜。またあることをきっかけに、人と距離を置くようになった男の子。藤咲拓海。そして、この二人の過去には、同じ人物が関わっていた!? そんな二人を支えていく親友二人。恋愛と友情、二つを一度に楽しめる学園恋愛小説!

登場人物

桃山 桜

身長160cm、体重49kg、誕生日9月29日、血液型A
スタイルも周りの女子と比べていいが、友達でない人と話すときは暗く、話づらいと思われるため学校では、モテない。だが本当は、すごく明るくて、人の笑顔を見るのが大好きな女の子。桜高等学校1年生A組。華とはクラスメイトであり親友。

藤咲 拓海

身長175cm、体重50kg、誕生日4月26日、血液型AB
背が高く、スタイルばつぐん、スポーツ万能のクールな男の子。学校では、1番、2番を争うほどの人気者。女子だけでなく、男子にも人気で尊敬されているが、なんらかの理由で女子を嫌っている。桜高等学校1年生B組。華とはいっこ、蓮とは幼馴染であり親友。

伊集院 華

身長162cm、体重42kg、誕生日1月7日、血液型A
スタイルばつぐんで、モデルなみにいい。リーダーシップがあり、学級委員もやっている優しい女の子。そのためすごくモテている。桜高等学校1年生A組。桜とは、クラスメイトであり親友。拓海とはいっこ、蓮とは幼馴染。

一ノ瀬 連

身長172cm、体重52kg、誕生日11月1日、血液型B
背が高くて、スタイルばつぐん。バスケット部に所属しており、スカウトが来るはどにうまい。学校では、拓海と同じく、1番、2番を争うほどの人気者。人前ではしっかり者だが、拓海や華の前では、本来の自分を出している。桜高等学校1年生B組。華と拓海とは幼馴染。

染。拓海とは、クラスメイトであり親友。

本田 彩

身長158cm、体重42kg、誕生日12月12日、血液型O
桜や華とは、同じ小学校で、小学5年生の冬に違う学校に転校して
いった。そして、桜たちの通う桜高等学校に転校してきた、活発な
女の子で、スタイルもいい。桜高等学校1年生A組。拓海のこと
が好きで、桜のことを心の中では嫌っている。桜と拓海の過去に関係
している。

運命のいたずら

【桜 side】

季節は春から夏に移り変わる。

私、桃山桜はここ桜高等学校、別名桜ヶ丘学園に入学して数カ月が経った。

私が校門に向かって歩いてみると、道が合流するたびに別の方向から歩いてきた子たちが新しい友達と顔を合わせては、世間話を楽しげに始めて、校門のあたりまで来た頃には、私の周りはとてにぎやかだった。

「桜ー!!」

後ろから、少し高い声が私の耳に届く。

「華!!」

声の主は伊集院華。私のクラスメイトで親友。彼女は私よりも背が高く、モデルのようにスタイルがいい。リーダーシップがあるため、学級委員もやっている優しい女の子。

この数カ月の間に、数人の男の子に告白されるほどにモテる。だが、誰が告白してもすべて断っている。

「藤咲君と一ノ瀬君よ!!」

私たちが校門を通過して、校舎のほうへ歩いていると、校舎の入り口

のほうから女の子たちの甲かんだか高い声が聞こえてくる。

「あっ！ 拓海と蓮だ！ あいかわらず人気だね」

と、華が感心したかのような目で見ながら言う。

でも、私はそんなふうにすごいとは思えない。そういう人気者の人ほど、人を裏切りやすいから。だから私は、

「うん……そうだね」

そっけない態度で返事をしてしまった。だが華は、笑顔でほほえんでくれた。どうやら、私の気持ちを理解してくれたらしい。私は少し安心した。

彼らは、数カ月間で学校で1番、2番を争うほどの人気者になった。二人ともすごく背が高く、スタイルばつぐん。

藤咲君は、スポーツ万能でクールな男の子。さまざまな部に助っ人を頼まれるくらいにうまいらしい。だから女の子だけでなく、男の子にも尊敬されている。だが、彼はなぜか女の子を嫌っている。仲が良いとすれば、いとこの華ぐらいだ。うわさではトラウマがあるらしい。まあ、スポーツ万能でスタイルもよく、クールとくれば、好きにならない女の子などいないだろう。

一ノ瀬君は、バスケ部に所属しており、スカウトが来るほどにうまいらしい。それだけでなく、彼は藤咲君とは違い、笑顔がとてもかっこよく優しい男の子。あの笑顔で優しくされたら、キョン死して

しまつかもしれない。

絶大的な人気を誇るこの二人は、学園のアイドルと呼ばれている。

ある日の休日、私の住んでいるアパートに引っ越し業者のトラックが来ていた。どうやら、誰かが引っ越ししてきたらしい。こんな時期に引っ越ししてくるなんて珍しいなあ。社会人かな？ そう思いながら私は部屋に戻った。

私が華と出かけるために準備していると、
ピンポン
インターホンの音が部屋の中に響く。

「華かな？ はい」

華と出かける約束をしていた私は、華かと思い急いで扉を開く。しかしそこにいた人物は……

「今日から隣の部屋に引っ越してきた、藤咲拓海です」

そう、目の前にいたのは私が最も関わりたくなかった、あの学園のアイドル。藤咲君だった。

私もすごく驚いていたが、彼も目を丸くして驚いている。それもそのはずだ。学校での地味な私しか知らないのだから、驚いても不思議ではない。

今の私の格好は、短いワンピースにヒールをはいている。学校での地味な私がするような格好ではない。

「このアパートの住人の桃山桜です。これからよろしくお願ひします」

とにかく、挨拶はしておかないと失礼だよね。

「こちらこそよろしくお願ひします。つまらないものですがどうぞ」と、お菓子のようなものをくれた。

「わざわざありがとうございます」

私は深々とお辞儀をする。

「いえ。では、失礼します」

そう言つて彼は自分の部屋に戻つていった。

まさか、隣人が藤咲君だなんて……この格好も見られちゃつたし……

……まあ、藤咲君は女の子とは話さないし大丈夫だよな。

この瞬間が、彼女の運命を変える瞬間だったのだ。まさか、隣人から同じ部屋に住むことになるなんて考えもしなかつたのだから……

【拓海 side】

ドアが開かれた瞬間、俺は自分の目を疑つた。

俺が今いるのは、引越先のアパートの自分の隣の部屋。俺は、隣の住人に挨拶をしようと思ひ、隣の部屋に来た。

そこにいたのは……桃山桜。

たしか、華の親友でいつも一緒にいる女。この女はスタイルもいいし、顔もいいからモテてもおかしくない。だが、学校でのこいつは地味な女だ。だから、こんな格好をするはずがない。

まあ、どんなやつだろうと挨拶はしておかないとな。

「今日から隣の部屋に引っ越してきた、藤咲拓海です」

挨拶をすると彼女は

「このアパートの住人の桃山桜です。これからよろしくお願いします」

この女、平常心をよそおっているみたいだがばれだな。顔がひきづってやがる。それにこいつ、俺の顔を見ようとしない。普通の女なら騒ぎ立てるのに……

この瞬間が、彼の心を変える瞬間だった。まさか、どうでもよかった女のことを好きになるなんて考えもしなかったのだから……

【桜 side】

よし！今日は肉じゃがにしよう！

私は買い物を終えて、すぐに晩ごはんを作ろうと台所に向う。すると隣の部屋から、

「ドタン……！」

という大きな音が！

私はすぐに隣の部屋に向かう。

「藤咲君！！ 藤咲君！！」

呼びかけても返事がない……

ドアノブに手をかけると、

「開いてる？」

鍵がかかっていなかったため藤咲君の部屋に入る。

「藤咲君？」

やっぱり返事がない。奥の部屋に行くと、

「藤咲君！！」

藤咲君が倒れていた！

「すごい熱！！」

どうやら、藤咲君が倒れていたのは熱を出したからみたいだ。

「大変！ はやく看病しないと！！」

私はさっそく藤咲君を寝かせて、おかゆを作ろうと台所に向かう。

「ん……う？」

作っている途中で、藤咲君が目を覚ました見たい。

「藤咲君！大丈夫？」

私は急いで、藤咲君のところに向かう。

「もも……やま？ 俺……なんで寝てんの？」

藤咲君、まだ少し寝ぼけてるのかな？ 声もいつもと違うし。

「藤咲君、熱で倒れてたから」

でも、物音がしたとはいえ、勝手に入っちゃったんだし藤咲君、怒ってるかな？

「そうか。ありがとな」

えっ！？ 怒ってないの？ 勝手に部屋に入ったのに。でも藤咲君も元気になったし、いいよね？ そんな会話をしているうちにおかゆができたみたいだ。

「はい。おかゆできたよ」

私はうつわに入れて藤咲君のところを持って行った。

「ああ。ありがとう」

よかった。藤咲君、元気になってくれたみたい。

「それじゃあ私は失礼します」

そう言い、ドアノブに手をかけようとしたとき、

「桃山！」

そう名前を呼ばれたので、とっさに後ろを振り向く。

「今日は本当にありがとう」

そう言つて、藤咲君は、無邪気な笑顔でほえんでくれた。

藤咲君の笑顔、初めて見たかもしれない。学校では全然笑わないしね。

「うん。困ったことがあつたらいつでも言つてね」

藤咲君、やっぱりいい人なのかな？ 藤咲君は、ほかの人とは違うのかも知れない。

「ああ。ありがとう」

藤咲君の囁きを出たあと、自分の心臓の鼓動が速くなっていることに気づいた。

【拓海 side】

「ん……う？」

目を覚ますと、俺はベッドで横になっていた。ふと横を見ると、そこには桃山らしき影が見えた。

「もも……やま？俺……なんで寝てんの？」

寝ぼけているせいか、桃山の顔がよく見えない。

「藤咲君、熱で倒れてたから」

そうか。だから体が少しだるいのか。最近だるかったしな。それで桃山が看病してくれたのか。

「そうか。ありがとな」

俺は桃山に礼を言った。すると桃山はほえんで台所に向かっていった。

「はい。おかゆできたよ」

おかゆまで作ってくれたのか。

「ああ。ありがと」

本当、桃山には、礼を言っただけだ。

「それじゃあ、私は失礼します」

もう帰るのか。なら、

「桃山！」

俺は桃山をひきとめた。俺は笑顔で、

「今日は、本当にありがと」

笑ったのすごく久しぶりのような気がする。あの日以来、笑っていないだろうから……

「うん。困ったことがあったらいつでも言ってね」

そう言っつて、桃山も笑ってくれた。

「ああ。ありがとう」

桃山は、なんで学校では、あんなふうに笑ったりしないんだ？笑ったほうがかわいいのに。
でも、あの笑顔に一瞬、ドキッとしたかもな。

予想外の接近（前書き）

予想外の接近

【桜 side】

あれから数日が経った。

あれからも何回か、私は藤咲君に、手料理をごちそうしている。藤咲君はいつもおいしそうに食べてくれるから、すごくうれしい。いつのまにか、藤咲君とも普通に話せるようになってきている。

いつも通り、藤咲君の部屋でごはんを作っていると……藤咲君の部屋の水道管が壊れてしまい、部屋がびしょびしょになってしまった！！

そのため、私は藤咲君と一緒に住むことになってしまった！！
こうなってしまったのも藤咲君が、

「桃山、お前の部屋に居候させてくれ」

なんて言っつて、土下座までされては、断れるわけもなくOKしてしまっつた。

私はまだ気づいていなかった。自分の気持ちの変化に……

【拓海 side】

俺は今、桃山の部屋に居る。

そう、俺の部屋の水道管が壊れてしまい、桃山の部屋に居候させてもらえるように頼み込んでOKしてもらっつた。

まあ、ほかの女だったら、こんなこと頼まなかっただろうけど…
…桃山は、ほかの女とは、何かが違うような気がする。その理由を
見つけるには、いい機会だと思っし。

俺はこの行動が、自分の過去を乗り越えることになるなんて、思
いもしなかった。まさか、俺がまた女を守りたいと思っなんて…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2718z/>

恋の果実

2011年12月11日19時47分発行